http://decfamily.p1.bindsite.jp/2013NEW/

We 25R

No.313　14/01/14

自分の頭で考える

前号に引き続き、多和田葉子さんの『言葉と歩く日記』（岩波新書、2013）から２箇所引用してみよう。

＊

(1)SNさん(保戸塚注:多和田さんの韓国人の友人)がドイツに行く決心をした時、「ドイツ人は日本人よりもっとひどいから行くな」と言って家族は猛反対したそうだ。隣に座っているSNさんのドイツ人の夫が笑いながらうなずいている。「韓国では日本人の悪口をいつも聞いていたが、ドイツに来てから出会った日本人はいい人ばかりだ」と言って、SNさんは微笑んだ。

しかし、わたしたちは、いい人だと言われただけで安心していられない。わたしはこの間観た映画『ハンナ・アーレント』の話をした。ナチス政権下のドイツ人を第二次世界大戦中の日本人に置きかえてみれば、よく分かる。悪魔でも天使でもない平凡な日本人が、兵隊にとられて、**自分の頭で物を考えるのをやめてしまった時**、彼は無残な殺人を犯してしまう。他所の国へ出掛けていって、罪のない人たちを理由もなくたくさん殺し、戦争が終わると、「あれは戦争だったから仕方なかった。自分は命令に従っただけだ」と言って平然としている。悪魔のような悪人が恐ろしいのではなく、「いい人」でも国の命令で人を殺せることが恐ろしいのだ。

（保戸塚注）このような指摘を踏まえて、「秘密保護法」や「積極的平和主義」について考えることが我々に求められているのではないだろうか。「この民主主義の世の中で悪いことなど起こるはずがない」という常識は、そんなに強固な物ではない。ナチスは民主的な選挙で政権を手に入れ、あのような信じられない振る舞いに及んだのである。日本の現政権が行おうとしていることに対しても、分かりやすく力強い主張のもつ危うさに気をつけて、冷静に見守ることが必要だろう。

＊

(2)母語で得られる情報だけに頼るには危険だ。外国語を学ぶ理由の一つはそこにあると思う。もし第二次世界大戦中に多くの日本人がアメリカの新聞と日本の新聞を読み比べていたら、戦争はもっと早く終わっていたのではないか。それはアメリカの新聞に書かれていることが正しいという意味ではない。書かれていることがあまりに違うというだけで、**自分の頭で考えるしかない**、何でも疑ってかかれ、という意識が生まれてくる。そのことが大切なのだと思う。

（保戸塚注）多和田さんは「自分で考える」ということの大切さを言っている。とはいっても、何もないところから考えることはできないわけだから、例えば新聞といったものを考える材料として活用することになるわけだ。その際注意しなければならない点が、常に複数の視点に立って材料を集めなければならないということ、つまり、一つの新聞の主張だけを鵜呑みにするのではなく、複数のニュースソースを参照せよというわけだ。なるほどその通りである。そして、その複数の視点を確保する一つの方法として、外国語学習も積極的に意義づけたいものだ。